

中部大学生物機能開発研究所の目指す研究

生物機能開発研究所紀要第2号の発刊にあたり、中部大学生物機能開発研究所が目指すところを紹介させていただきます。2001年4月に中部大学は、全国から農学、工学、理学、医学等の分野の第一線の研究者・教育者を招聘して応用生物学部を開設し、バイオサイエンス、バイオテクノロジー、バイオエコロジーに関する本格的な教育研究を開始しました。応用生物学部の多くの教員は本研究所への併任によって研究活動を展開しています。本研究所は生物が長い進化の歴史の中で獲得してきたさまざまな機能を解明し、開発し、人類の生存、生活、尊厳を発展させる食、環境、健康にかかわる諸課題の解決にあたるという大きな目標を掲げて研究活動を開始しました。さしあたって3つの具体的な研究プロジェクト、食品機能プロジェクト、先端生命プロジェクトそして環境評価プロジェクトを立て、それぞれのプロジェクトに4～5名の研究者を配置しました。特長ある研究として伸ばすべく、研究環境の整備を可能な限り行いつつ、新しい場での第一歩をふみ出しました。ここで取り上げた研究課題は、それぞれの研究者のこれまでのキャリアを一層磨き上げ、そのとぎすまされた研究力をもとにして、今日の生命科学研究にその解決が期待されている人類史的また地球規模での諸問題です。今年度の研究成果は各報告にある通りであり、個別研究としてはそれなりの成果をあげ今後の研究方向を確かなものに行っているが、プロジェクト全体としての成果を紹介する段階には到っていません。研究離陸のための整備と始動推進エネルギーは十分であり上昇飛行中であります。まだ定常飛行には到っておらず、いわんや着陸の体制に到る状況にはありません。

一方、本研究所は知の交流の場として、研究者の成長を支援し、また研究の普及を通して研究活動に対する支持を得ることを目指しています。本年度は公開での講演会を3回開催し、世界から第一線の研究者もお呼びして、時宜を得た話題や地道な研究活動を通しての研究観などを話題にし、研究のあり方やすすめ方を考える機会を設けました。この講演会には学部学生も参加し、若者に研究の臨場感を与えることにも貢献しました。この知の交流の場としての機能を本誌も受けついでいます。それは本研究所の研究課題とは直接関係のない課題を総説あるいは論説として積極的に寄稿いただき、生物科学あるいは生物産業さらには生命尊厳のあり方など現在の生命科学技術の有効性と限界を日常的に判断する材料を提供するためです。

いずれにいたしましても本研究所はバイオサイエンス、バイオテクノロジー、バイオエコロジー研究の流れに流されるのではなく、流れを作りだすことに意欲を燃やして出発しました。皆様の叱咤激励をいただければ幸いです。

2002年3月

生物機能開発研究所

所長 山下 興亜